〈編集後記〉

調査報告の連載について

関西自然保護機構会誌28巻2号に，「生物多様性保全と関西自然保護機構会誌」と題して編集後記を書いたことがあります。そのなかで，2006年3月に滋賀県が制定した「ふるさと滋賀の野生動植物との共生関する条例」では，保護区の指定を含めた希少種の保護対策，外来種対策および有害鳥獣対策を主な柱とし，野生動植物との共生が図られる地域社会づくりをめざしていることを紹介しました。そして，関西自然保護機構会誌においても，種多様性や希少野生動植物種，外来種などの報告が多く取り上げられてきているが，滋賀県の条例を着実に推進していくためには，そうした会誌に掲載されているような，多くの貴重な調査研究成果が欠かせないことについても指摘したところです。

このことは，2006年度から「ふるさと滋賀の野生動植物との共生関する条例」に基づいて，滋賀県版レッドデータブック「滋賀県で大切にすべき野生生物2005年版」の改定にむけた野生生物生息状況調査や「生息・生育地等保護区」の指定に関わる保護区となる可能性のある地域の調査などを実施していて，種のリストのような地味な基礎データ不足からも，一層痛感しています。つまり，高邁な調査研究成果でなくとも，例えば種の同定に信頼のおける調査であれば，限られた地域のフロラやファウナなどの報告の連載も，会誌の果たすべき役割ではないかと考えます。是非，どの県，どの地域からでも結構ですので，そうした行政の施策を推進するうえにおいても，必要不可欠な基礎データに関わる地道な調査報告の連載を期待しています。

（小林圭介）

ＫＯＮＣ新体制に向けて

今号には，「ＫＯＮＣと大阪自然史センターとの合流に関するメッセージ」を掲載させていただきました。ＫＯＮＣの目指すところは，新体制においても変わらず，精神は生き続けることとなります。むしろ，より一層発展的に自然環境の保全に寄与・貢献する活動組織となることを願っての合流です。編集事務局としては，今後もより一層，会誌の充実に努めたいと考えていますので，会誌の新企画に関するご意見・ご要望などお寄せください。お待ちしています。

ＫＯＮＣのこの１年の活動を振り返りますと，これまで同様にＫＯＮＣ主催のシンポジウムやセミナーが活発に行われました。今号はシンポジウム「ナラ枯れ」に関連して「ナラ林」を特集しましたが，28巻２号に四手井先生は「カシノナガキクイムシによるナラ枯れ害」と題して寄稿くださいました。それによると，すでに70年前に滋賀と福井の県境でナラ枯れに遭遇されたとあります。森林にナラ枯れが拡大することに危機感をもたれたこと，森林保全に向けての研究の進展を切望されていることなどが書かれています。緑の中に点在する赤茶色のナラの枯死樹木は今後もさらに拡大するのでしょうか。

私の研究室の話題で恐縮ですが，今秋，実験的に春日山原始林に防鹿柵設置を行いました。この実験結果がでるのは数年先ですが，森とシカの関係から，照葉樹林の保全につながることを期待しています。今年はブナ科植物の結実が順調で，シードトラップにはたくさんのイチイガシやコジイなどのどんぐりが入いりました。春日山原始林に設置した自動撮影装置にはニホンジカだけでなく，イノシシやタヌキやシジュウカラなどが写り，にぎやかな夜と朝の森を伺い知ることができます。しかし，ドングリの大量供給にもかかわらず，林床にはあいかわらずブナ科の実生や稚樹がほとんどなく，シカがこの森で食料調達していることがおおいに気になります。二次林でも照葉樹林でも，動物と森がほどよくバランスを保つことはなかなか難しいようです。

表紙の写真は京都市風致保全課に提供いただきました。お礼申し上げます。ナラ枯れ研究で多忙をきわめておられる小林氏に表紙の言葉をお願いしました。次号はＫＯＮＣセミナーの話題から，「ナラ類と里山管理」を掲載予定です。ご期待ください。

今号の原著として，鳥類，魚類，草本および樹木などさまざまな研究対象に関する論文が揃いました。シリーズ第７回目となるエッセーは，大阪市立大学理学研究科植物生態機能研究室でのとりくみをご紹介いただきました。自然環境や生物のしくみ解明へのアプローチはやはりおもしろいと感じながら，いずれの原稿も読ませていただきました。著者のみなさまありがとうございました。新年度も会員のみなさまの原稿をお待ちしています。

（前迫ゆり）